

# 離島において学生が求めるシェアハウスの調査

2020年度 太田ゼミ（都市計画研究室）家島空き家活用プロジェクト  
（3年 飯田麟太郎 池田美里 猪尾佳之 岡本瑞生 三阪洋貴）

## 1. プロジェクトの背景と目的

近年、全国でシェアハウスが大々的に展開されている。2019年度4月時点では4867棟のシェアハウスが展開され、過去5年間で4533棟増加していることがわかった。また、シェアハウスは新しい住まいの形態としてだけでなく、空き家の活用や地域活性化の観点からも注目されている。

そこで私たち太田ゼミでは空き家の増加、高齢化や若者の流出が顕著であり、また離島である兵庫県姫路市家島諸島の現状や課題・立地の特性を踏まえ、どのようなシェアハウスが学生に求められているのか、調査を行った。

## 2. 家島諸島の概要

家島諸島は兵庫県の南西部、姫路市から約18kmに位置し、播磨灘の沖合に44の島々から構成されている。本島は家島であり他に坊勢島、男鹿島、西島などがある。この4島で約5,000人（2020年度4月時点）が暮らしている。人口は年々減少するとともに、若者の流出による高齢化、空き家の増加も見られる。

## 3. 家島でのフィールドワーク

まずは2020年3月に家島の右ノ真浦地区にある空き家と、宮地区にある空き家の2軒を調査した。その際、いえしまコンシェルジュの中西和也さんにお話を伺い、その後実際に家島内をサイクリングした。

右ノ真浦地区の空き家は真浦港から徒歩5分、宮地区の空き家は宮港から徒歩3分に位置し、どちらも5DKの二階建てであった。どちらの空き家も壁や床、天井の損壊などといった著しい劣化は見られず、清掃や家具の整理を行えばすぐにも人が住むことが可能な状態であった。一人暮らしをするには広すぎるような間取りで、数人とシェアハウスとして居住するには十分に可能である。また、中西さんとのミーティングでは空き家増加に歯止めをかけることや、島外からの人口流入を図り、自治会の維持や島の活性化について、何か適当な仕組みが必要であると議論が上がった。そこで家島の空き家を利活用し、島の活性化に繋がるような学生向けシェアハウスの展開が考案されることになった。

次に、実際に離島などの人口規模が縮小し、高齢化が進む地域において学生が大学を通して介入することは、どのような仕組みで展開され、またその効果や課題について、調査する必要があるの

ではないかと考えた。また、離島における学生シェアハウスは本当に実現することは可能かどうか、学生はそのシェアハウスに何を求めるのか調査することにした。

図1：右ノ真浦地区にある空き家



（出所）猪尾佳之撮影

図2：宮地区にある空き家



（出所）猪尾佳之撮影

## 4. 学生シェアハウスについてのヒアリング調査

学生シェアハウスについて調査するため兵庫県神戸市垂水区にある明舞団地の学生住居の担当の久保園洋一さんへ、オンラインでのヒアリング調査を2020年6月に行った。古い団地である明舞団地は、高齢化と建物の老朽化、県営住宅の空き部屋の増加が問題であった。このような問題を解決するために、2011年から兵庫県、兵庫県住宅供給公社、兵庫県立大学が連携し、県営住宅に若者

である学生に居住してもらい、学生シェアハウスを展開している。学生がシェアハウスを拠点として地域に介入し、地域全体の活性化を図った。

ヒアリングでは主に①学生シェアハウスを展開する意義、②展開する上での課題、③学生居住の今後の展望について伺った。以下はその結果である。

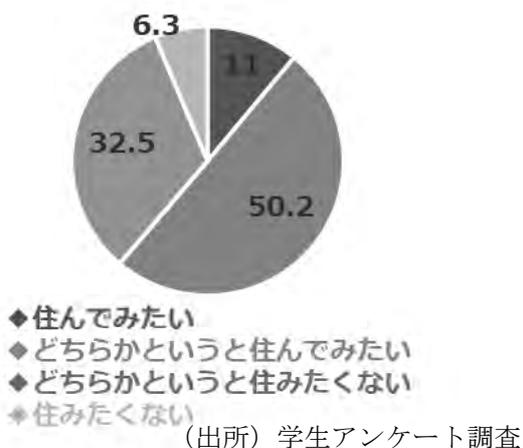
- ① 学生シェアハウスの展開の意義は、地域に若い人が住むだけで意図せず住民同士での触れ合いに発展することだ。更に明舞団地では、今まで地域行事に出なかった人も参加するようになった。
- ② 学生シェアハウスを展開する上での課題は、人間の入れ替わりによる事業継続力の低下、初期のシステムの継続が難しいことだ。また、シェアハウスを管理運営する県、学生が入居する地域、学生が通学している学校の3者が得する仕組みを生み出し、それを維持することも課題である。
- ③ 学生シェアハウスの今後の展望は、若者が住むことによる自治会活動の維持や高齢者の見守りの観点から、若者に入居してほしいという需要が高い。そのため、全国的に高齢化している場所は今後展開される可能性がある。

以上の3点より地域における学生シェアハウスの展開は少なくとも活性化への1つの手段となり得る可能性はあり、シェアハウスを拠点とした学生と地域住民の方との交流を図ることは可能であると考えた。

## 5. 学生アンケート調査

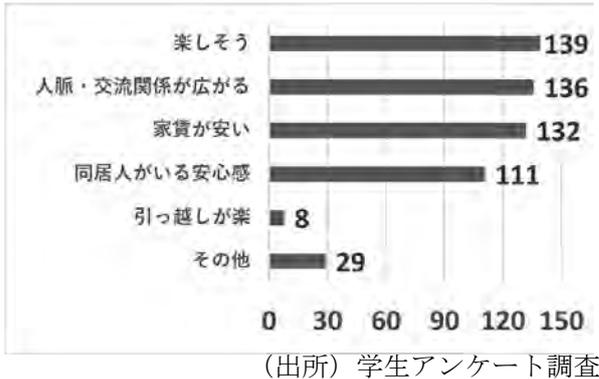
家島における学生シェアハウスに関する、学生の意識調査を2020年7月に環境人間学部1回生209人を対象に行った。

図3：家島に学生シェアハウスが誕生した場合住みたいか(%)



家島でシェアハウスを展開することへの興味は1回生においては約半数は持つと考えられる。

図4：シェアハウスにおけるメリット(最大3つ)



1 回生においてシェアハウスには共同生活への興味やコミュニティ、家賃の安さを求めている。

また、家島の魅力についての自由記述回答では、「島民の距離が近く、島暮らしに魅力を感じる」、「地域住民の繋がり・コミュニティ」、「アットホームな雰囲気」等といった、島民や島民が生み出すものに魅力を感じていることがわかった。一方で、家島の課題についての自由記述回答では、「島を知る人が少ない」、「生活が不便」、「宣伝能力の低さ」等といった、家島について知らない人、知る機会の少なさが課題として挙げられた。

以上、アンケート調査より少なくとも学生は家島でのシェアハウス生活に興味を示し、人と人との繋がりに魅力を感じていることがわかった。

## 6. まとめ

家島において学生シェアハウスの実現可能性はゼロではない。学生アンケートの結果では、家島の魅力は地域のコミュニティという回答が最多であった。そのため、学生は離島において、地域のコミュニティに深く関わる学生シェアハウスを求める可能性がある。

## 7. 今後の課題

新型コロナウイルス感染症の影響で家島での現地調査や、他の離島で展開されている学生シェアハウスに関するヒアリングなどが行えず、調査対象の偏りが発生している。今後は、家島の住民の方やより多くの学生の意見を聞き、他自治体の事例も参考にし、離島における学生シェアハウスの実現の方法やその具体的な仕組みについての調査が必要である。

## 8. 謝辞

本調査プロジェクトの実施にあたり、ご協力いただいた家島コンシェルジュの方々、その他多くの方々には大変お世話になりました。記してお礼申し上げます。

(文責 猪尾佳之)